

# 山とスキー

神威嶽

△1600

第四十五號



大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可  
大正十三年十二月三十日印刷納本

大正十四年一月一日發行 (毎月一回)

札幌山とスキーの會發行

大正十四年一月發行

記事

ターンを支配する素因に就ての概念  
も少し寒ければ彼は

中野誠一〔二〕

凍死をしなかつたであらう

加納一郎〔一三〕

所謂バンデミー

道と道伴れ

大島亮吉譯〔二五〕

山地に於けるスキーの實際

加納一郎〔三一〕

スキーの驚異第二編に就て

岡村源太郎〔三七〕

彙報抄録

〔ノイエ・ベルニナ・シャンツェ、全日本スキー選手大會、新刊書紹介〕  
全國中等學校スキー選手大會、北大スキー部計畫

寫眞版

電光形登行  
滑落防止

澄み渡る鋼青の大氣の中に、山は白銀に躍り立てり。斧刀の鋭さもてその稜線は、深き大空を劃し、足下、眞晝の陽光にまばゆく輝ける雪面は、遠く擴がりて白に波立つ。峯の上高く、かすかにも靜かに立てる三人のシローイフェル、光につままれて碧き背景に對せる、その端正の姿は、食肉鳥の如く、溪谷に臨んで動かす。やがて一人は動き、身をかどめ、高く躍び、手にせる杖を打ち振りつ、飛鳥の急に谷へ下るが如く、緊張のけだかき容姿にて、驅り降り、飛び立つ雪煙は、彼の後に細くむらがり上る。二人はその後を見守り、次で高く躍び、彼に従ひ追ふて滑降し行く。三人は彼方の斜面を、下へ、すばらしく、息づまる、電雷の早さもて降り、やがてなごやかなる斜面に到りて、尙とどまらず、雪上に一線を残して谷に入り、小さく、小さくなりて山影にかくれ、再び現れては、また終に見えず。三つのシユプールは山腹を下へ、粉雪の面に矢の如く、眞直に引かれ、想出の、をほろにも美しきに似たり。山は依然として靜かに、冬の銀玉の中に、陽につままれて、壯重無邊に横る。幻影の如く、三人のシローイフェルはすぎ行けり。——下へ、下へ、長くふくらめるシュヴングにてとどまるまで。靜かに立ち、ゆるやかに杖に倚りつゝ、彼等は振りかへり、あふぎ見る。彼等の褐色の敢勇の面に、冬の日燃え、彼等の眼に、世の全ての美は輝く。

[Balduur, Der Winter, Jahrgang. 13.]

## ターンを支配する素因に就ての概念

中野誠一

ターンを支配する素因 (Factor) に就て考へる事は、合理的にターン (或はスウィング) を練習し、研究し或は他をコピーする爲には甚だ重要な事であらうと考へる。そして此の問題に關して考察を試み乍ら種々のターンを實際に行ふ時、初めて、ターンなるものに無限の興味を覺えるものであると思ふ。従つて、かゝる問題に就て筆によつて他の人に説明をする事は決して當を得た事ではなく、又、かゝる問題は自ら考察してこそ價値あり興味あるものと思ふ。然し現在多くのスキランナー中、特にターンに就て興味をもつて居る人達で、そのターンを惹起するフワクターを分解的に考察する人の尠い事を思はされるのである。それで筆者は自ら他には興味の少いものであるとは知り乍ら、その問題に就ての概念をまとめたものを此所に示して、練習者や指導者に批判を得たく、且つこの一文が練習者に一層の興味を起させる一因ともなればと思ふものである。筆者の望みが達せられれば幸甚である。

ターンを終始する要素は種々ある。その中で主要なものは次の數個であらう。勿論、全てのターンはその多くのフワクターの二つ以上のコンビネーションによつて完成されるものであつて、單獨には用ひて効ない事が多く又その多くは、一つのフワクターには必ず他のフワクターが前提されるものもある。然し、それ等を個々に拾ひ上げてその概念を説明して見度い。

## 一、リフティング (Lifting)

リフティングには廣義のリフティングと狹義のリフティングの二種がある。

狹義のリフティングとは何れか一方のスキーを完全に雪面から離して従つて体重を他の一スキーに全部委ねる方法で、ステツプ・ターン (Step Turn) や L.S.T は此の最も著明なるものである。リフトされたスキーは全く雪の抵抗を逃れて自由に左右前後に動かし得る。一度リフトしたスキーを再度雪面に置いた場合次に取る可き動作が二種ある。即ちその間に今迄体重を懸けて居たスキーをリフトするものがその一つ、雪面にリフトしたスキーを再び下しても他のスキーをリフトせないのが他の一つである。前者はステツプ・ターンであり後者は L.S.T である。

一方のスキーをリフトしてこれを、足を捻ねる事によつて或る方面に向け更に雪面に下してその時他のスキーをリフトするステツプ・ターンはその殆んど瞬間に全く新しい方向に直進する。L.S.T の様な場合にはその瞬間に新しい方向に進行を初めるがそれは決して直線ではなく、一種の曲線であつて、此の曲線的運動の或る範圍を進むと兩スキーの落下と雪の抵抗との均衡が保たれて、再び直線の運動になるものである。此れはリフティングによつて後述するラダー・アクションを起させた結果である。

ステツプ・ターンの如きリフティングの場合は、スキーを再度下した瞬間に受けるショックは可成り大きなものである。云ひ換へれば、必然的に上体は今迄の方向に投げられ様とする。此の爲には上体のバランスと云ふ事を最も考慮せねばならない。L.S.T の様な場合には前者程では無いにしても矢張或る程度のショックは逃れない。又、この場合はリフトしたスキーを瞬間的でなく漸進的に雪面に下し得るからそのショックは又瞬間的でなく来るからバランスは保たれ易い。

廣義のリフティングに於てはスキーを全く雪面から離す様な場合でなく、殆ど全ての體重を抜き去つてから、そのスキーを雪面から離す事なく新方向に向ける事もふくむものであつて、クリスチニア、その他多くのターンは先ず第一に此れによつてそのターンを開始するものである。

ターンの要素としては最も簡單なものであると見てよい。その練習は後述するシフテングにも最も良い豫備的動作である。此の動作には決斷が最も必要な氣持である。

## 二、ジャムピング (Jumping)

先づ第一に兩膝を屈し、それを伸す瞬間に跳躍して雪から全くスキーを離し、その抵抗を失はしめてから、體重の自由を得て、多くの場合にはボディスウィングをもつてターンを完成するものである。

ジャムプしてターンを行ふ全ての場合はそのターンが急烈である事を逃れ得ない。又同時にその爲に受けるショックは巨大となり前の進行方向へ投げ出され様とする。これをさけるには體をターンの内側に傾ける必要がある。此の程度は一般に滑走速度の大小に比例して居ると見て差支えない。又次には脚の受けるショックである。此れ又相當の經驗をもつて初てめそのショックの緩和を上手に行ひ得るものであるがそれは膝と腰とを着陸の瞬間に曲げるだけの仕事である。此の簡單な一つの動作がそのバランスを適度に保持する上に最も重要であり最も困難なものである。

又前記のリフティングと同様に、スキーを字義通り雪から離さずに、只體重を一時殆んど完全にスキーから脱ぎ去る事も廣義のジャムピングと謂ひ得られる。ジャークド・クリスチニアは此の方法で行はれるものである。

であるから、ターンを行ふと云ふ目的だけならばジャムピングは必しも高く跳ぶ事を要さない。雪からスキーを一寸も離せば充分な筈である。然し普通のジャムプターンの場合には、可成不必要と思はれる程に高く跳ねる。その理由は種々あるが、空中に居る時間を長くして次の動作つまりボディスウィング、及びバランスを保つ爲の姿勢、そして着陸時に受けるショックに備へる餘裕をもたしめる爲である。又、ターンの爲のジャムプには杖を利用する事が甚だ有効である。(本誌第三十四號平塚直秀ジャムプターンの就て参照)

### 三、ボディ・スウィング (Body Swing)

體を捻る事である。此には二つの方法があつて、ジャムブターンやジャークド・クリスチアニアの如く、そのボディ・スウィングは甚だ急激に行はれるのと、外の多くのターンに用ひられるが如く漸進的にスウィングをさす方法がある。何れにしてもボディ・スウィングは全てのターンに實行せられるものであつて、一時はターンの全てを此のボディ・スウィングで解決しやうとした時代もあつた。然し此れもその筋肉的な努力が大きいから、全ての場合にボディ・スウィングで解決する事はエナジーの浪費であつて、あまりに感心出来ない事である。

此の動作は各個の人々によつて方法やその説明が異つて居る。各々の習慣であり又個性であるから決定的なものでは無いと思ふ。だから、ボディ・スウィングに就て研究す可き問題はスウィングの型や方法よりもむしろその強さ乃至は大きさに即ち程度に就てでは無いかと思ふ。然し此れは個々の場合によつて皆異なる結果を得るから、そのスウィングの程度は體驗に俟つより他は無いかと思ふ。ボディ・スウィング云ふ事は横滑り(サイドスリップ)を前提して居るが横滑りはターンの素因にはならない。然し若し他の條件が一致した場合で同じ程度のボディ・スウィングを行ふ事を想像するならば大体次の個々に就て知つて居れば良いと思はれる。

雪の抵抗が小であればボディ・スウィングの結果は大きい。即ち、雪質の悪い場合や積雪の深い場合にはボディ・スウィングの結果が小である。

速度の大的時程その結果は大である。

斜面の急な程、その結果は大である。

スキーが短い程その結果は大である。

ボディ・スウィングはターンのフワクターに於ても大いに重要な部分である事を忘れてはならない。

#### 四、ラダー・アクション (Rudder action)

進行して居る二本のスキーの各個の受ける抵抗の差より生じるラダー・アクション即ち舵の作用を利用してターンを行ふものでターンのフワクター中の最も興味深いものである。カウルフィールド氏は面白い例をもつて示して居る。筆者もその例を藉りて説明して見度いと思ふ。

ボートに乗つて直線に漕いで居る時、急にその舵を或る角度だけ屈けて固定したならばボートは直に廻轉運動を起してその舵の角度を再び變えない間は或る圓周上を廻航するものである。此れはその進行力が内的に存在するものであつて、ボートの乗組者の力、即ちボートの中にある力、換言すればボート自身が進行力を有して居る場合である。然しかゝる内の力でなく外から力を供給されて進行して居るヨットに就て見るのに、もし直線に進行して居るヨットの舵を或角度だけ廻轉する時は矢張前者と同様にヨットは直に廻轉運動を始める。然し此の場合はその舵の角度によつて程度には差があるが、ヨットは或る期間又はある範圍の角度の廻轉を了つた後は再度新しい一つの方向への直線運動に移つて進行を繼續する。此のヨットに於けるミ殆ど同一の現象によつてスキーのラダー・アクションが行はれるのである。

ヨットの風力なる外力に相等するものはスキーの落下の力であり、船體と舵とに相等するものは一對のスキーである。此の現象は要するに兩スキーが平均を缺いた抵抗を受ける結果、その抵抗に順應して、均衡のとれる位置迄廻轉するものである。そして又一度均衡を保てばそれ以上何れかの方向に廻轉しかけても直ちに舊に復するるのである。

今直滑降から急に兩スキーのテイルを均等に開いて體重も均等に懸けて全制動に移れば、今迄の直滑降と同一方向にスノーブラウを以つて進んで行く、此れは均衡のされたラダー・アクションの最も簡單な例である。

次に此の全制動の姿勢から、突然一方の例へばRスキーをその長軸の方向に突き出して、他の即ちLスキーの尖端と今突出したRスキーの後端との相接する様な形を作る。勿論此れは全然不可能な仕事ではあるが假に其様なスキーの位置を考へる。此の時は直ぐに兩スキーの抵抗の均衡が破れてLの方向に廻轉を始める。そしてその結果は新しく作つ



たRスキーのテイルとLスキーの尖とをあだかも普通の全制動の尖端の様な關係をもつて一種の全制動形の滑降をとるに到つて再度均衡が保たれるのである。(本誌第三年八六頁A圖参照)

以上は極端な例を以つて考へて見た場合であつて、Rスキーを前例の様にその長さだけその方向に出す譯には行かないが、若しRスキーをその半分の長さだけ、その方向に出すなら、これは明に一種のテマレックを表はして居る。その時には全制動の場合と前例の様な場合とのほど中間のものに見られるから、その廻轉も又、前例のものゝ半分と見る事が出来る。(本誌第三年八六頁B圖参照)

扱其の次を考へるに、もし全制動と反對に直滑降から、スキーの後端を開かずに尖を兩方平均に開いたならば如何なるかの問題である。此の場合は若し完全に兩スキーの受ける抵抗が一致して居たなら、不安定ながらも均衡を保つて、今迄の方向に進んで行く、全制動の場合なら假令大きな抵抗が偶然に何れか一方のスキーに生じその均衡が破れても直ぐ前の全制動の位置に復すが、此の丁度全制動と反對にスキーを開いて居る場合、若しも一寸した抵抗を一方のスキーが受けて均衡が破れたならば、直ちにその抵抗の大きな方向に廻轉を開始する。而して落着く結果は相接した兩スキーのテイルが谷に向つて離れた尖端が山を向いた一種の全制動形となるのである。勿論、此れも實際の場合にはかくなる迄に轉倒をまぬがれない事ではあるが、單な理論を考へれば以上の様である。

此の例は一種のクリスチアニアを現はして居るものであつて、クリスチアニアは此の種のラダー・アクションの一部分を利用するのである。

甚だ説明が困難ではあつたが、ステアリング、即ちラダーアクションの大體の理論と現象とを説明した心計である。此のステアリングなる廻轉のファクターは實に簡單であつて實行も又比較的容易であると云ひ得られる。

ステアリングの實行上最も重要な點は、體のバランスとステアリングポジションのフィクシオン(Fixation)である。バランスは主に練習によつて經驗するより他はないが、フィクシオンは主に注意によつて行はれる。初めステアリングの、ポジションにスキーを位置させた後は、その形をあくまで保持する様に腰と脚を保たねばならぬ。

## 五、シフティング (Sliding)

シフティングとは體重位置の變移を指すものであつて、Rスキーに主に委ねられて居た體重をLスキーに移すか平等に懸けられた體重を一方に多く委ね移す様な事を云ふものである。

前に述べたラダーアクションの説明には全然シフティングを想像せずに論じたものであるが、多くのターンに於てはラダーアクションとシフティングとが相伴はねばならないものである。そして此のシフティングによつて初めてラダーアクションがより有効に利用されるものである事を忘れてはならない。

ステップターンやL.S.Tは明に一方のスキーを雪から離し又は雪面に下す動作であつて、シフティングの最も有効に利用される例である。特にステップ・ターンはシフティングのみのターンと見て良い。

前項で説明した通り、全制動の姿勢で滑降して體重が両方に平均なシフトをなしつゝある場合はラダーリング・ポジションは均衡を保たれ従つてスキーは直線運動をして居る。然し此の場合、若しRスキーにその體重の大部分をシフトしたならその結果はRスキーの受ける抵抗がLスキーより大きなつて、直に今迄の進行は變位してLの方へ廻轉始めるであらう。

此の事は甚だ簡單であつて、最も適切な例はステム・ターンである。雪や斜面の状態が良ければステムターンは單に一定したラダーリング・ポジションと交互のシフティングのみによつて完全に行ひ得る。

シフティングを二種に別けるなら、瞬間的シフティングと漸進的のそれとする事が出来る。前者はステップ・ターンであり後者はステムターンが代表して居る。瞬間的である程、ターンに角が立つて小さくなるが従つて體の受けるショックも大となる。後者は圓滑に行はれる。

何れのシフティングにしてもショックに耐えるだけの練習が必要であるが、最も大切な事は決斷であると見て良い。不思議にシフティングでは往々決斷のない爲に練習に時間をとる事がある。

## 六、トー・ウエイティングとヒール・ウエイティング

(Toe-weighting & Heel-weighting)

爪尖に體重を委ねる事がトー・ウエイティングであり、踵に委ねる事がヒール・ウエイティングである。

トーウエイティングは比較的上體が前方にかゝり、踵はスキーの上に置かれるのが普通であるが、時にはスキーから離れる事もある。ヒールウエイティングは體が後方にかゝるのが普通で、爪尖がスキーから離れる事はあり得ないが足の心持はあだかもスキーから離れる様である。

矢張りカウルフィールド氏の例を藉りる事にする。二本の鉛筆の真中同志を直角に交叉させて紐で縛る。そして一本を机の上に立て、その上端をつまんで獨樂の様に廻すなら、比較的廻轉は圓滑であらう。然し交叉も鉛筆の真中で行はずに一方に偏せてやつたなら、その水平に位置させた鉛筆は重力の對稱を缺いて、その廻轉が力をより多く要する様になる事は明である。スキーのターンに於てトー・ウエイティングを行ふ時は丁度前者を利用したものと見る事が出来る。即ちスキー及び脚の進行中その廻轉の心棒となる可き部分はスキーの中心にある事が必要である。故にスキーの一つの軸を中心にして左右に廻轉さす爲にはスキーの中央に近い爪尖を中心として足を捻る事が必要となる譯である。此のスキーの左右廻轉をヒールウエイトで行ふ事は丁度前例二種の鉛筆の組合せの中後者に相當するものであつて廻轉には甚だ不利益である。前項のラダーアクションは大體に於てスキーの左右廻轉を惹起するものであるから、原則としてはトーウエイトを尊重す可きである。

次に前例の様な二本の組合せた鉛筆に於て、廻轉の心棒となる如く立てた鉛筆を指で押えて、他の指で水平にした鉛筆を押してそれを廻轉さす時はその押す可き部分は成可く心棒に遠い方が利益である。即ち廻轉に外的の力を利用するには成可くその中心を離れた點に力を加ふるが良い。スキーのヒールウエイトは此の點を利用するものであつて換言すれば外的の力を加へてターンする時そのスキーの中心より離れた所にそれを與へ、そのターンの完成を容易ならしめるのである。

従つてスキーの場合には外的に力を與へやうとしても踵以外には方法がない。そして踵に力を加へる事はスキーの上下運動を與へるに止まるから、此のヒールウエイテイングは殆どスキーの上下廻轉に利用されるものである。

スキーがフラットになつて或は小さな程度のエッジをされてターンをして居る時にはトゥウエイテイングである事が絶對的に必要である。此の場合ヒールウエイテイングを行ふ事は徒らにそのターンの作用を妨けるに過ぎない。然し或る程度以上にエッジされて居るターンの種類や又は一つのターンの或る範圍ではスキーの中央部を中心に上下に廻轉させる事が可能であるから、此の場合にはヒール・ウエイテイングが甚だ有効である。

一例をとるならダウンヒル・クリステアニアの初期にはヒール・ウエイテイングは何らの意義もないものであつて飽く迄トゥウエイテイングであらねばならない。然し全く廻轉が進行してダウンヒルよりアップヒルに移つた時はヒールウエイテイングが大に有効となるのである。

故にターンの實際上では此の二種のウエイテイングをよく使ひ分ける事が甚だ重要であつて、此の問題を等閑にしてターンを練習するのは極めて不利である。

そこで此の二種のウエイテイングの實際上の現象を見ると、トゥウエイテイングは圓滑に運動が終始して不規則なショックを受ける事が少いが同時にターンがロングターンとなる不利がある。又ヒールウエイテイングはショートターンなる利益があるが運動が圓滑を缺き不規則な大きいショックを受ける場合が多い事は止むを得ない。實際上では斯如一長一短であつて要はその使分けの如何にあるのではあるがターンの本質から見ればトゥウエイテイングは自然的でありヒールウエイテイングは多少の無理を強るものである。故に初心者にはターンの概念を與へる爲には、云ひ換へればターンの練習を教えるにはトゥウエイテイングを初めに行はしめた方が有効である。

猶ほ特に注意すべき事はトゥウエイテイングは爪先に體重を懸ける事であつて決して前脚に體重を懸ける謂では無い。同様にヒールウエイテイングも踵に體重を委ねる謂であつて後脚に體重をかける事でない。前脚に體重を懸けてヒールウエイテイングを行ふ事もあるし又後脚に體重を懸けて猶ほトゥウエイテイングとなる事もある。テレマークは前者を用ふる事が多いし、L.S.T.のリフトされた時は後者の形式をとる。往々此點を誤解する人があるのを見て附記して置く次第である。

## 七、エツヂング (Edging)

カウルフ井ールド氏はノーマル・エツヂド・ポジションとスキッド・ポジション(Normal edged position & Skid position)の二種として可成嚴密な區分を強ひて居るが筆者はかゝる繁雜を避け度いと思ふ。

ターンに對するエツヂングの目的に二種ある。一つは消極的な意味で、エツヂングによつて、フラットの場合に生じる障害を避けるもので、例へばステムターンにエツヂを用ふるのは多くはフラットのまゝスキッドしたりステムしたりすれば外側のエツヂが不規則な抵抗を受けて不便であるから、内稜のエツヂングを行ふのである。多くの硬い雪面のエツヂングは位置の上から自然的にエツヂされる外は大抵此の消極的の目的に行はれるものである。

然し、エツヂングは他に一つ積極的な目的がある。雪の少し硬い様な状態ではエツヂングした爲に返つてそのエツヂに邪魔されて倒れる事があるが、もし新しい雪でスキーマのバンドが雪に埋る位の時にはエツヂングは最も重要なターンの一フワクターとなる。

此れは極めて簡單な理由であつて、スキーマの尖のバンドが雪によつて上壓を加へられる點を利用するものである。

スキーマが雪中深く埋り進む事なしに滑走するのはバンドがある爲であつて、もしスキーマを平に置いて雪中に埋め、テイルの部分を押せば自然上に出てしまふ。皆バンドの雪から受ける壓力の方向からである。此の點を利用して、スキーマを稍々右に傾けて雪中を走らせたならその進行は直ぐに右に方向を變じる。若し直滑降中に右スキーマのアウトサイドエツヂを立て、左スキーマのインサイドエツヂを立てたなら直に右に廻轉する。かくの如くエツヂングによる廻轉は極めて簡單である。然し上記した通、此れは雪にバンドが埋る場合である事を忘れてはならない。

右に述べた七種が最も多くターンを支配するフワクターである。尤も、落下の速度そのものもターンを支配する最も重要なものであるかも知れないが、ターンに於ては、必然的に必要な事であつて今更喋々する要は無い様に思ふから、蛇足

は添えたくない。扱その七個のフワクターの中、ランナーの肉體的勞力を主體としたものと、自然の力、即ち運動そのものを主體としてその力の利用によつてターンを完成するものとの二種ある事を意識せねばならない。リフティング、ジャムピング、ボディスウィングは肉體的勞力が主體であり、ステアリング、シフティング、トリアンドヒールウェイティング及びエツヂングは運動力自身の利用である。従つて、肉體の力も消費する事は前者に多く後者に少い。それでターンの實際の利用なる點から論じるなら出來得る限り肉體的勞力の儉約を計るが有効である。又前三者中、最も勞力の僅少なものはリフティングである。此の二點から見ても、ターンの最初に練習すべきはリフティングと此れに最も關係の深いシフティングとであらうと思はれる。先づ此の二種を分解的に理解した後、他のフワクターの練習に進む可きが順序である様に考へる。そして、ジャンピングとボディスウィング特に瞬間的のそれは最後に練習すべきである。

その點から考へれば、ターンの種類としてはステプターンを初めに練習し、ジャークドクリステアニア、ジャムプターンは最後になるが良いと思ふ。

附記—此稿は、且て筆者が本誌に書いた點もあるが、多少考への変つて來た處も生じ、又誤謬も發見したから二三重複した個所もあるが一括したものである。幸に讀者諸兄のお許しを願ふ次第である。

## も少し寒ければ彼は凍死をしなかつたであらふ

— 立山アクシデントに關する一考察 —

加 納 一 郎

好んで奇矯の言をなす様に思はれるかも知れないが、私は一九二三年一月の立山のスキー・アクシデントに就て、あのとき気温がもう少し低ければ板倉は凍死をせずにすんだのではなからうかと思ふのである。

生まれ彼の極りない悲は運命と觀するより他に途はない。今更及ばぬ當時の天候に就て兎や角云ふも詮ないことではあるが、あの稀有の出來事に就て私共はたゞいつまでも感傷にのみ囚はれてゐてはならないと思ふ。そのなかに、示される數々の事實をより深く省察して、私共の進む道の將來の爲に考へて見るのも無駄ではなからうと思ふ。

勿論私は此のアクシデントを批判的に觀るよりも前に、此が爲に幾多の啓發を受けたもので、此處でも亦その可否に就て云はうとするのではなく「も少し寒ければ」と云ふ假定の下に一つの考を述べたいと思ふのである。

前にお斷りして置かねばならないのは、私は積雪期の立山を知らぬものである。従つてその局部的氣象状態には通ぜぬものである。或は机上の空論であるとして非難されるかも知れない。それは甘受するつもりである。たゞあの實際の場合に就て気温と雪云ふ積雪期の登山の重要な問題に關して立体的に考へを進めたいと思ふのである。體驗深き御教示を得たいものである。

アクシデントの事情はリーダーであつた横さんが本誌の第二六號に責任ある記載をして居られる。今それによつて當時

の有様を摘録して見る。

日	時	行	程	天	候	雪	質	備	考
一月四日夜		東京出發							
五・朝		富山着							
六		富山—藤橋		日は輝いて居つたが極樂坂山の頂には不漸に雪煙を巻いてゐた。		雪は重く		一行三人、寫眞師二人、人夫一〇人 合計一五人	
七		藤橋—鬼ヶ城		薬師の頂の邊に断え間もなく雪煙が北に棚引く。温度は零下一二、三度であつた。ヒツケルの鐵が手につく。		重い雪の上を進む。雪崩の危い所は河原へ降り			
八		鬼ヶ城—立山温泉							
九		立山温泉滞在		終日雪降る。					
一〇		〃		風雪					
一一		立山温泉滞在、附近にてスキー練習をなす、人夫數名羚羊狩に向ふ		好晴、粉雪なり。 まことに空も静かな雪も軽い申分の無い日和であつた。					
一二		立山温泉滞在		再び盛んに雪降る。					
一三		〃		松尾よりザラの一帯雲に没して風聲盛んに、薄く雪降る。				人夫を勵まして松尾峠の上に約半量の荷を運ばせた。	
一四		立山温泉—松尾峠 (後・一)		透徹な風の戦きが充ち渡る。限なき日の晝に輝く山岳を見渡して立つた。恰も日が音もなく沈み入る山々に赤く名残の映光を止めてゐる。					



朝	前、 八	正 午	後、 一・三〇	後、 二	後、 三	日 没
	一行出發 天狗平を過ぎる	室堂の三四丁午前の 露出した岩に腰掛け て晝食をとつた。 一ノ越へと向ふ	室堂へ直滑降 室堂出發	天狗平近くに差しか ゐる。	唐檜の下にて食事	天狗平を突切つて追 分の方へ下る唐檜な ごの粗林に出た。
明方になつて洩えた空は蔽はれて星の 光も遮られて終つた。激しい風の音が 疎林を渡る。 漸く明けて見れば蔽はれてはゐるが雲 も高く風も風いた。風は西南で山の峰 を掠めて雲の流れが不斷に走る。		雪がちらつて風も少しはあつた。 高きにつれて風力を加へ	此時降雪はかなり激しく吹雪く時は數 間先も見えなかつた。	突然に猛烈な風が吹きつけて三人は將 棋倒しに遇つた。風は西北である。そ の疾風は激しい寒を伴つて四周模糊裡 に辨ぜずなつた。風力は斷つて倒しつゝ さを以て三人が立つを待たず倒しつゝ けた。忽ちにして濡れた衣服は板の如 く凍つて終つた。	寒氣さ風と寒とに戰つた。	風も變らず寒は雪に變じたものゝ依然 として勢を變えなかつた。
	積雪は他に比して淺く所々 に岩頭が露れてゐる。雪は 勿論Kinsieになつてゐる。雪は は粉雪の吹き固められて堅 いアルタ或はその間を綴つ たやうな柔い場所は表面氷 結して踏めば破れて落ちこ むところと云つた場所が續 いた。	且つ雪面堅きに過ぎて歩速 頗る進まずなつた。				唐檜の疎林の中は天狗平よ り滑走は遙かに苦んだ。平よ 云ふのは立木に遮られて強 風が吹きぬける爲に樹蔭
		此處より丸山及び 人夫衆を全部歸ら しめた。				

一七				一六					
後、	後、 一〇	前、 六	前、 ・五七	後、 七	日 没	後、 三	一 一	前、 七	後、 九
人夫屍体捜索に出てた も吹雪の爲め歸る。	三田氏と共に温泉に つく。	慎氏下る。	板倉君死す。	三田氏先に下る。	松尾峠から直下の雪 の溪を下る。	松尾の露營地につ く。	天狗平の頭の近くに 出ず、食事	露營地出發	唐松の影に露營
			今迄降りしきつた空が見渡すかきり晴 れて星層に満ちてゐる。直ぐ近くの松 尾峠の上に大きい星が輝く。					吹雪の走る彌陀ヶ原を注意して歩む。 風は力を減じたが雪は盛んに降つてゐ る。	風は止まぬ。吹雪も激しさを減じない。 朦朧たる吹雪の朝が來た。
						松尾峠の上までは雪が深く て重いために意外の時間を 要した。峠は湯川に面した 側が風ですつかり雪庇にな つてゐた。 積雪は殆んど胸に達して度 々各自のスキーが脱げた。	例の立木の蔭の波状雪、而 も重き段に達せんとする深 さを風雪に戦つて進むのだ	膝上に達する深さの登りて あつた。	
					電光形にラッセル をして下る。				

一八	温泉滞在	吹雪く。		
一九	〃	雪降る。		人夫二人を残し他は下山。
二〇	〃	好晴碧き空輝ける峰々		
二一	〃	湯川より濃霧巻き昇り突降る。屍の上には霏々として雪が降る。寒が風さへ交へて行程は非常に艱難なるものであった。		一八名の救援隊到着
二二	遺骸と共に立山温泉を下り芦峯寺に着く			

此によつて見るとその時の天候は一、一四、二〇の三日が好晴であつた他、多くは降雪又は曇天で殊に一五日午後二時からの風雪は稀に聞くところの状態であつた。残念なことには此の行に於て気温の表示が少いことである。寒暖計は持つて行かれた事であろうが、生命の問題であるかゝる場合には顯る餘裕は到底あり得べきことではないが、若し氣壓計（アネロイド）はあまり精確ではないが、比較的の見當はつけられる。携帶には此が最も便利である）があつたならば多少とも天候の豫想が付け得られたかとも思ふ。まだあまりシユプールの繁くない日本アルプスの冬季登山には寒暖計位は必ず持つて行かれて、今の有様ではスキーをやる人の外に冬季の高山氣象觀測を行ひ得られない點を考へられて、種類の氣象狀態を研究する様にしたものである。横道にそれだが、あの風雪の有様は之を如實に想ふことは容易の事ではない。その風力は如何程であつたか。その気温は何程であつたか。その湿度は何程であつたか。

今伏木測候所（最密の觀測所である）の報ずるところを見るに、一九二三年一月中には一日、九日、二二日、三一日の五日間が暴風として記されてゐる他遭難前後には何等顯著な現象が表れてゐない。そして此の暴風日数は平年よりは一日少いのである。九日及び一二日の風雪は一行を立山温泉に籠城せしめたことは明かであり、一日の快晴は此の低氣壓の中心に在つたのではなからうか。山は粉雪の状態であつたと云ふことであるが、伏木では八日午後より降雨があり、漸次雪を交へて九日朝全く雪となつた有様である。一三日より二一日までの間は、三・八<sup>米/秒</sup>乃至八・八<sup>米/秒</sup>の最大風速を示して居て、その最大方向は北西より南西に移つてゐる。最小三・八<sup>米/秒</sup>のあらはれてゐるのは好晴であつたを記されてゐる二〇

日である。中旬に於ける氣温の平均は平年二・二度なのに對して〇・七度となり一・五度低きを示してゐる。然しながら一三日より二〇日に到るまで、海鳴があつたと云ふから天候は概して險惡であつたことは争はれない。芦崎寺に於ける降水量も一五日には二三・〇mm、一六日には一五・〇mmで勿論あの風雪によるものであらふが、九日の三〇・〇、一日の三六・〇に比してさまで多量とは云へない。

而しながら三〇〇米近くの高層に於ては山麓や、沿海の氣象とは全く著しい相異を示すものであつて、あの長時間の顯著な風力が、伏木測候所の觀測器に影響を及ぼしてゐないのも無理はない。

遭難は一に天候の激變と、その險惡な状態の意地惡るい繼續とに在ると云ふことが出来る。先づ第一暴威を振つたのは風である。

此が不幸の第一彈であつて、行動に多大の不便困難を來さしたことは著しい。ことに甚しい疲勞の状態にありながら、風の惡戯があるところの樹蔭の積雪の凹凸の如きは何ともあきらめ様のない始末の悪いものであることはスキー家の經驗するところである。積雪が非常に深くなつたことも行動の自由を束縛して、多大のエネルギーを消費せしめた。此は短時間に急激に降雪のあつたためで誠に止むを得ない。然しかく身を没する雪に遭つてはスキーは全くその威力を失つてしまふものであつて、私共の力では何とも仕方のないことである。普通のスキーの三倍の中のあるストー（シベリアで用ひらるゝもの）を以てしても及ぶまい。

種々の要素のうちで最も私の注意を喚起するところのものは湿度である。普通に寒い暑いと云ふときにはそれは正確に氣温の高低を意味するものではなくて、私共の感覺を支配するものは湿度が大きな力をなすのである。それ故に單に寒暖計の示す氣温が低くとも或時は寒く感じない。之に反して氣温が氷點以上でも濕氣に富んでると非常に寒く感ずる。また風の有無も寒さを感じる上に大きな影響を及ぼすものであることは周知のことである。此の遭難の場合に於て最初強い突風と共に雲が襲ふて來て、此が日没に到るまで續いたことは致命的原因の第一である。私は信するのである。雲とは雨と雪とが混つて降つて來るものである。空氣中の温度が（必ずしも地上近附の氣温ではない）高いときに雪片が解けて落ちて來ることもある。「忽ちにして濡れた衣服は板の如く凍つてしまつた」と云ふ。何と云ふ情ないことであらふ。冬の山では雪よりも水が恐ろしい。濡れた手袋は乾いた手袋に比して凍傷のより危険なる誘因となることは法則として注意されて

る如く、か様に衣服が凍つてしまつては萬事休すである。水は雪よりも浸潤性が多い。過度の運動によつて内からは汗で、外からは降水で潤られて、或はそれが氷となつて堅くなる事が如何に不衛生であるかは云ふまでもない。「倒れて跳きながら立ち上ると顔面に氷が張りつめて目が見えない」と書かれてゐる。鼻や、耳が、みすく凍傷に犯されて行くことが解つてゐて、どうすることも出来ないものである。何ミ云ふ悲惨であらふ。

此等の状態は結局大氣温度が、高い爲に起る現象であつて、直接身體に悪影響を及すのみならず、此うした状態に積つた雪の性質が如何なるものであるかはスキー家のよく知るところである。横さんは雪の重かつたことを繰返し記されてゐる。而も尙、その積雪量の點に於てもかく濕氣を多く含んだ雪は低溫の下に降る雪に比して多大の深度を以て積ることもまた自明の理である。此が爲に行動に多大の支障を來したことは前にも云つた。

一體一月の立山で何故にかく濕潤な雪や霏が降るのであるか、私には想像されない位である。若しあのとき氣温が多少低くて、風があれ程強くとも、濕度が小で降る雪が乾燥した粉雪であつたならば衣服が板の様に凍るこもなく、行動がもつと自由で、凍傷から脱れることが出來たかも知れないことは想像に難くないのである。

三人が同時に同様な状態に置かれながら板倉のみが、かくも甚だしい凍傷に犯されて終に他界する様になつたのは、私共の深く考へねばならないことである。横さんは内在的缺陷があつたのではないかとも云はれてゐる。私も亦之を信するより他に満足な理由を見出せないのである。たゞ一點注意すべきは、板倉の衣服であると思ふ。ピツケルを杖の一本としてゐたことや、ビンドウングが不完全であつたことも個人的原因をなすかも知れないが、衣服の點に於て板倉は他の二人に比し薄着であつた。上衣の方は左程ではないが、ズボンの方を見ると、黒サージズボン、メリヤスズボン下、毛猿股一枚宛にすぎない。三田君は雜紗ズボンに毛ズボン下二枚、横さんは毛登山ズボンに毛ズボン下二枚を着用してゐられたに比して可なりの相違である。誰でも氣付いて居らるゝことであらふが、上衣は比較的厚着がし易く且つ之の調節が容易であるが、ズボンの方は厚着がし難く且つその調節が一日中殆んど不可能と云つてもいゝ位面倒で大義である。それにもかゝはらず、寒さの最も打撃を被るのは大腿部であることは尙に都合が悪い。

私はその當時より想つてゐるのであるが、板倉はそのシーズン赤倉で宮殿下のお伴をした他、此の立山行が北海道を去つてからの山らしい山のスキーの最初であつたため、今迄北海道でやつてゐたまゝの用意をやつた様である。上衣の方は

多少厚着であるがズボンの方は前シーズンに北海道の登山に用ひてゐたのと大差ない。勿論彼は耐寒力の増進と云ふことを考へてゐた。「北海道の冬期登山の道」に於て彼は『手が凍つて来て危いと思つたら、直ちに豫備の手袋をはめかへなければいけない。ふだんは一枚で慣らして置く必要がある。木綿の軍用手袋でさへ随分な寒さにもたへられる様に慣らして置いて丁度いゝのだ。そして豫備二枚を大事にしまつて置けばいゝ』と云つてゐる。此れだけの心掛けあつた彼にしてあの事あるは洵に惜しいことである。彼は恐らく立山の一日を北海道の中山性山岳の氣候と同じに考へたのではなからうか。事實は案外それよりもずつと深い、重い、雪と濕つた天候であつたために終に彼は悲しい運命に陥つてしまつた。

乾いた状態の下に在つては人は尙零下五〇度以上の寒さに耐え得る（ナンセンの北極探險では最低零下五〇・八度であつた）然しながら恐るべきは氷である。シベリアの話であるが、充分に防寒衣をまつてゐても、一寸した不注意で皮膚が水に濡れるとその部分だけが直ちに凍傷に犯されると云ふ。恐るべきは氷である。

立山の一月が常にかく濕つた重い雪と、強い風雪の樓家であるかどうか私は知らない。然し恐らく此の時期は、積雪の生長期であるからして、雪質の變化の著しいことは想像に難くない。

私は單に氣温のみを考へて判断してはならない。常に他の氣象要素、特にあまり注意を引かぬ、そのくせ重要な影響を與へるところの湿度に就て考へ及ぼすことを怠つてはならないと思ふ。

〔一九二四・九・九・於札幌〕

## 楨有恒氏の言葉

前稿楨兄の御校閲を乞ひましたところ次の様に御所感をお漏し下さいました故併せてここに載せて頂くことに致しました。

全つたく日の経つのは早いものでもう一年半余にもなります、が悲しみの跡は今も癒えないことです  
初頭のお断りに唯感傷のみに捕へられず、事理を究明すべき旨を述べられます。(中略)又此の問題を取扱はれる御苦心の程もお察し致します。

素より斯る問題は、或は心理的に或は生理的に、其他種々の方面から考へ得ることと又その主要點を何處に置いて見ても、自由に出来ることです、そして若し夫等の研究にして當を得たものであるならば、將來の人々にとつて、裨益することの多かるべきは、申すまでもありません。かくて次第に之等の礎に立つて、より深く、より親しく山に接することが出来て行くものと思ひます。然し山を知る私等は如何なる場合でも、特に夫れが死と云ふ悲しむべき結果を齎した時に於ては、その命を以て爲した行爲の眞精神を何時も第一に尊びたく思ひます。板さんの心持、それを想ふと一切の無常なるものは影像の如く消ゆるを覺えます。

御指摘の如く私は彼の時は寒暖計を持つてをりませんでした。

山に行く時は、或は最高最低と普通のとを持つて行くこともあるのですが、不精と杜撰(これに依つて云ひ譯けも立ちませんが事實なのです)が禍して持参したり、しなかつたりしてゐるのです。大いに非を悟つたこゝです。

アネロイドも、もう少し山岳地方の基準バロメーターが便利に分るやうになれば、用ふ人も増すことと思ひます。  
それから玉稿の御主眼たる「もう少し寒ければ」とのことです。

眞に若し然うであつたならば以前から思つてもゐました。海岸に近い我國の山岳は天候の變化の殊に激しいやうに考へられます。而して積雪期の登山で最も恐ろしいことは、御説の如く、霽や雨に遭ふことです。彼の高さで、彼の時期に於て 霽が降るとは全く想像だに致しませんでした。

話は少しく傍に入りますが、之等の天候に對しては毛皮の着物以外に無いやうな氣がします。そして出来るだけ洋袴と上衣との接續點を間隙の無からしむることです。又上衣も普通の洋服式の釦止めの隙から雪や風が容易に吹き込みます。ギリヤークの着用してゐる袋のやうな仕立も好参考と思ひます。又顔を猛烈に吹雪かれることは、意氣を非常に阻喪させます。之れも内外共に毛皮の頭巾を用ふるのが私の經驗では最たるものです。

まことに過去を顧る時『若し斯うであつたならば』云ふ残念さが、種々の點に就いて思ひ起されます。殊に濕度に就ては其後の冬期登山する人間には忽に出來ぬ問題となりました。此度の御研究は私は申す迄も無く、一般の人々にも裨益するところ多きを信じます。

マロリーも死にました。板さんのやうにと想像を逞うしてゐます。

先だちて今は永き憩ひに入れる友、吾れは沈み行く夜半のしじまに座して想ふ、この親しき面影、ゆるやかに天翔り來て、悶ゆるわが心を揺りつゝやさしき歌に、高き世を讃ふ。

九月十三日

横 有 恒



## 所謂パンデミイ

君 一生

此前本誌で夏街所感ミ云ふ題の中に洵に、意義ある所謂アルビニスト振る連中への痛文を見たが、あれで然し氣の弱い人、つまり内氣の人達が余り頭を痛めぬがよろしいと思ふて一筆動して行きたいと思ふ。何しろ今が、登山とスキーの所謂 Pandemic。な時代であるから一寸物好きな風をしたり、變つた外國品を身につけて居たりすると、皮肉られるものも無理からぬことであると思ふが、然し皮肉る人其人は、別に外國の物新らしいものを脊負つたり持歩いたりして出掛けたから、又は風變りな風をして賑かな町の中を通つて居た

からとて、さういう事をした人が凡べてハンカ臭いと言ふ譯でもあるまい。たゞさうゆう風をしたりする人の中に往々氣障な連中があるから、まあさういうバチルスにアンテイトキシンを喰はせいたのであらうと思ふ。何でも昔も今も變らぬところであるが流行の過渡期にはいろいろのバチルスが目につくものであるが然しそれ等の悪性、良性のバチルスの中から本當に後世に名を止むる程の傑物が生れ出ると云ふことを考へて見るならば決してドンナバチルスも落膽するには及ばぬところである。ミバチルス研究者は地上の一角で叫んで居る。

「スキー隊のラツセルを標の人夫がやるのか？ などとお笑ひになつては困ります」とは、本誌四二號に出て居た或登山紀行の一文であるが、全く理窟を抜きにして何だか冬の山へ入つて行く、本當の登山者の氣分がよよく表はされて居る言葉だと、私には心から嬉しく讀まれました。恐らくこの文章をお書きになつた方は、トテモ山の好きなそして山と云ふことを可成り深く研究せられ、山についての確りした考へを抱いて居らるる方と思ひますが、この文章をお綴りになつた時には、別に堅苦しい理窟なきにとらはれてお出でにならなかつたことと思ひます。

そのフライな氣持から出たこの一文にこそ非常に高價なところがあつて味へば味ふほど、齒答への意味が含まれて居ると思ひます。

つい此間或内地の友人から手紙が

来た。

おい、もうこちらでも雪が降つたよそれは十月十七日御同様に俺達にとつては折角の公祝日だ。とうとう山へも行けず一日部屋の中でフンゾリ返つて居た。然し余り残念だつたから一日中窓から首を出して雪の降る野山を眺めて暮した。

何時もの工合ならこつちの方は十一月末にでもならなくちや雪なんか見られないのだが、今年は天候までがどうかして居るね。

こつちの方で今頃降つた位だから雪と寒さと來たら有名なお前の方ぢや、九月の末からでも降つて居るんぢやないかい。

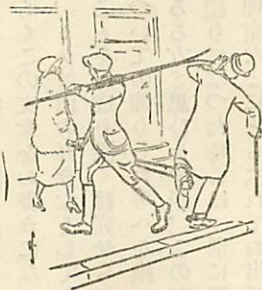
(下略)……何はともあれ、今頃から雪が降つて來るんだから、俺も今年俺達の當り年だと心勇んで居る

(下略)  
随分亂暴な手紙ですが、兎に角北海道と云ふこゝても寒くて、余程北

方の國の様考へて居りますが、こんな想像して居る位ですから、北海道の冬の雪の良いこと位はよく知つて居ると思ひます。この返事の一文中に、こんなことを書いてやりました。

九月の末から降つて居るんだらうとは、少しヒドイ。やつぱりこちらでもあの日(十月十七日)が初雪だつたから安心するがよい。内地とこちらと初雪が同時に來たなんちゆうことは、未曾有のことかも知れぬ。

(下略)  
然しくだらぬ世間問題については少し遅れて僕達が知るかも知れないが、冬が長くて寒いだけに、雪の良い事も想像されよう。だからスキーの事にかけては、北海道が本場だ云ふても色眼鏡ではなからうが。



# 道と道伴れ (ヘンリイ・ヘーク譯章)

大 島 亮 吉

## 譯者の言葉

一九二〇年「道と道伴れ」といふ書名のもとに上梓されたヘンリイ・ヘークの一小書は、ひとつの特異な個性のあらはれと情熱的な主観の燃焼とをもつて、そのうちにわれ等のあるものをうつなにものかを蔵してゐる。それはこの地上の多くの國々のあひだ、多くの山々のうちを彼れがさまよひ歩いたあひだの山登りや旅のスケッチ、観想を収めたものである。そのうちにはマツターホルンのフェウラーローズ・ベスタイグングや、アペニンの秋にのぼつたモンズ・アルバヌスのこと、彼れのハイマートのぐるりなる北獨乙の森の逍遙、さてはコルフウからコンスタンチノーブルまでの彼れの漂遊の旅、ホリヴィヤとベルーの山湖についてや、またスキーでの散策、氣球にのつての空の旅のことなど多くのものを含んでゐるが、しかしその一卷を掩ふてどの頁にも漲るは、彼れの生涯を徹しての、「さまよひ歩き」に對する沸騰たる熱情と終ることなきそれへの憧憬と願望、小さき自己圍繞の人生の埒外に放たれて、思ふがまゝにその人生を解放し、思ふがまゝにより、ひろき人生の廣野をさまよひ歩き、終ひにはおほらかな自然の慈愛を求めつゝ、永遠の漂遊者となつてその後半生を風と雲のなかに没せんとしたその信仰に近い心意の燃えあがりである。われ等はすでに古く、ヘンリイ・ヘークの名は彼れがそのスキー術についての著デア・シーに依つて知つてゐた。しかるにいまみる彼れのこの「道と道伴れ」や「山と山登りについて」といふ哲學的な論文に於て特異な彼れの性格のシルウエツ

トをみるのである。その性情の熱烈なるに於て、その陰鬱な資質と孤獨さに於て、またそのつよいホ  
ヘミアンの傾向に於て、彼れは寂しい彗星を思はせる。その人生を、生命の燃焼を宇宙的な世界に求  
めて、そのなかへと没入してしまつたことに於て。

これ以上に彼れについて言ふの必要はなからう。私はこゝに彼れがその著書の最初に記した献本辨  
ごその第一章とをこゝにをこゝにをこゝにをこゝにをこゝにをこゝにをこゝにをこゝにをこゝにをこゝにをこゝにを  
らく充分に讀者はみとむるを得るだらうから。そして私は、かゝるひとりの人間の思想的側面によつ  
て何らうつても響かぬ己れの所有主なる讀者に對しては、その冗事に於てなんと謝罪していゝかその  
言葉を知らない。

## 献 本 辨

モ ツ ト オ

われはわれ自ら太陽であらねばならぬ。而し  
て、われはわが光りもて、彩なき蒼海に神の  
徳を描かればならぬ。

(アンヂエラス・シレシウス)

この小書をば、予は嘗て予の愛を求めて、而して予がその求愛にまで酬ゆることなかりし女性にま  
で題寄する。遠く未知なるものに對するあらゆる希求と願望、あらゆる異國への廻國行脚の漂遊は、

この女性に對しての酬ひられざりし憧憬より出でた。若し予にして他の女性にまでわが愛を移すことをなし得たならば、しかく予はひろくさまようことをなさなかつたであらう。かくて予は、予がそれによりて得達したるもの、さまよひて得たるこれらの漂遊の想ひ出をば、それが自らは知らざる源泉であるところの彼女にまで、多くの感謝をもつて贈るであらう。それはまさに然るべきことではないか？かくてこそ輪廻は完きものである。而してすべてのものは、それらのいできたりし女性にまでかへるのである！

## ク　レ　ド　．　．　．

(譯章)

予は予が「道と道伴れ」とについて、いま想ひかへしてみる。いくたの山々の巔を予の足は踏んだいくたの街道を埃りが予の着衣の色をかへしめた。あらゆる類ひの道伴れと共に予はさまよい歩いた友と稱すべきものを予はすこしも有たぬ。仲間さへも予にはわづかであつた。しかしそれ等はみな予にはいみじきものであつた。それらのものはいろいろなる國土の異なる衣服は装はれ、そが皮膚の色は雑多であり、その言語もいろいろなるトーンをもて予が耳朶にまでひびいた。とはいへ、しかしそれ等のものにはすべてひとつの共通なるあるものをもつてゐた。——それこそはすなはち、彼れ等はみなさまよひ歩かねばならぬ、さいふことであつたのだ。この地上のいかなる地域に於ても、予は彼れ等とおなじきさすらひのものを見出した。予はそれ等のものさ——わがまことの道伴れ、と草原砂漠の砂のなかにわれ等が終ることなき途を求め歩いた。定客用の卓子にわれ等は共に座つた。そしていつとはなくまた別れ去つてゆくのだ——再びは會ふこともなきわれ等が漂遊の途のうへにて。

予をしてかゝる終ることなき漂遊の身にまで驅らしめたものは、未知なものに對する秘やかな願望であり、異國への郷愁であり、而してわが日耳曼の血に流れる深い謎である。その謎とは、これは誰れにも解き難く、予自らの心のなかに於ては、それがしかく予をして休みなく、且つ不幸にさまよはしめねばならぬといふことはない。といふ答へを見出し得ないところのものである。予はさまよはねばならぬ。予は永遠にさまよはねばならぬ。而してまた、予はなほつぎることなく多くの道をさまよひ歩きたいと熱望してゐる。

しからは、予は山々をのほり歩くべきか、森の小徑を求め歩くべきか、硬く坦かなる街道の氣易き途を大股に歩むべきか、それとも天鵞絨のごとくに滑らかなる雪の面を細き板片をもて推しすゝむべきか、あるひはこの大地のうへに輕き氣体の充てる氣囊の下に吊されし小さき籠にのりてたゞよひ浮ぶべきか。——しかそがさまよひ歩きの形に予は意をとめぬ。予にこりてそはみな、その根底に於て異國への予を驅る熱望であり、わが生の心自由な存在であり、天福の心情の休みなき、錆ざる喜悅であるに於ては。

世の人々がいまだ若しとなしてゐるひとつの齡のなかに、いま予は立つ。いまだ人生の秋は予の頭髮に灰白色を織り混ぜはしない。しかもいかなる熱望も、いかなる欺瞞もすでに予の人生の春が過ぎ去つたといふこゝろを確かめはしない。けれども、もう若人のあの充ち溢れるやうな力は予には再びかへり來ぬだらう。そして予が道伴れは次第にすくなくたつてゆくであらう。予の皮肉はますます鋭く尖つてゆくであらう。そして予が意力はすこしづゝ撓め易くなつてゆくだらう。

予には思へる。いまや予はひとつの轉回點のうへに立つ。予がいま予の身うちにもつすべてのものは予の最初の漂遊の途に行つて以來さまよひ歩き來たのだ。そして、そがためにいまや予が身うちのもものは予にまで、更にいまひとつの新しい漂遊の形式をはじめしむることとなつた。もはや以前のごとくあのやうに情熱的ではなく、あのやうな愁思を抱くことなく、あのやうに願望の熱き眼をもたずに、——けれどさやうにいまやすべてのことを知りつゝ、さやうに朗らかに澄み切つた眼をもつ

て、秋の夕暮れの空氣のごとき心意と刻まれし大理石の塊がもつごき熱とをもつて。わが身うちのもの、わがまはりのものゝ多くは、わが身とゝもに多くをさまよひ歩いた。而し、いまやわが漂遊の更に新しき途に於ては、それらは全く關りなき他のものであるだらう。而して予はその新しい漂遊への門途のまへに於て、これらの過去のさまよひ歩きについてわづかばかり願望し、少時の休みをとるべくわが家に場所を求めたのである。されば予は予をばそこに落着かせて、その回想のために一週間毎夕べを捧げるだらう。予はわが家の前方に燃えあがる火の傍らに予を座らせて、想ひを過去に行つてみやう。また予は嘗て予が若き熱情の炎をもて書き記せし古き紙片をさがしてみやう。それらは予がその時分、予の眼に映じ、心にうつりしゝた予が生活を記録したものである。

雑多な變化のなかに、印象が予にまでよみがへり来るだらう。時についての順序はないのだ！すべてはそれがあるまゝにきたるだらう——今日は北より、そして明日は南より——過ぎし遠き時のなかより、そして近く思ひも新らしきさきごろより。予はそれらにいまなんらの説明は加へぬ。そはたゞわが心に浮びあがりきた。そして直ちに消え去りゆくひとつの心の繪畫にすぎざるがため……

おゝ、それらはいまこゝにある！ よろしい、予はそれらをとどめやう！ 書き記さう！ これらの頁はいかに予がこれまで漂浪のうちに生活し、いかに人生について想ひしかを語ることであらう。これらいまは多く予にとりて不眞實であるものも、すべてひとたびは予にまでいたく眞實として現れ來たりしものである。かゝる思考のまちがひであり、かゝる思索の不熟でありみらるゝことはあり得やう。されど予はそれにまでいま心勞するこゝろはない。それはそのためであつたのだから！ 予は智識を渴望はしない——すくなくともその時に於ては、そして現在に於てははなく。たゞ回想の鏡面体を予はわが顔前に置くだらう。そしてそが予に示すところのものを、予は語るだらう。

さていま、貴君等は予を了解するであらう。さていま、漂遊に於て予と共に人生の視野を廣め、人生の象徴をうちながめたわが道伴れは、たゞ予のごとくさまよひ歩きのためにさまよひ歩いて、なんら他の目的のためにはなかつたわが未知の道伴れは、予がこの考想と予がこの生活を了解し、是認

するだらう。

目的はたゞさまよひ歩きそのものである。たゞへそが死のごとくあらうとも、はた生のごとくあらうとも。人生の意義はたゞそのなかにのみ横はる——かくて人生の目的とはたゞ人生それ自身であり得る。自らを正しくするためや、または眞理を見出すためではなく、たゞ思索のためにのみ思索するといふやうな人々や、ある一定の地點に到達するためではなく、さまよひ歩くことの悦びのためにのみさまよひ歩くといふ人々や、或ひは群居生活の法則としての「そは吾人にとりて有用なるあるものを生み出す」といふことを信ずるがためではなく、そのなかに生くることの悦びを見出すが故に生るといふやうな人々にまで、これらの頁はなんらかの血の波をもつて呷くものがあるであらう。「わが途こそ、わが目的なり」たゞかく想ひ、かく感ずる人々のみ、予に正しさを與へるであらう。而して予を了解することが出来るであらう。

而して、かくのごとく信ずることなき人々もまた予がこの一書を手にとることもあらう。そしてそのとき、彼れがもしも人生の意義を他に求め、人間労働の改革を神聖なりとする教義を信仰する精神の人であつたならば、彼れは予がこの目的なき遊歩や目的なく、そのためにまた終ることのない途に對しては、おそらく大いに憤ることであらう。

一週間のうち夕暮れ、予はこの予の回想の終りにまで達したときには、さてまたこの休みの場所より立ちあがりて、かの小さき丘のうへの高みから、予が生れ故郷なるこのわが町に挨拶して、再び予が人生の途に歩みゆくだらう。生きよ！ 汝が人生に生きよ！ 汝は汝が家の門のうちに夢みることなかれ。人生の廣野が汝の人生であり、喜悅である。生きよ、而して夢みるなかれ！ 再び行け！ さまよへ！ よりひろくさまよへ！



# 山地に於けるスキーの實際

加納一郎

## 電光形登行に就て

大きな斜面を連続的に登る最も普通の登行方法は、斜登行と方向變換とによる電光形登行 (Zickzackgehen, Zickzacksteigen) であつて、スキーの登行にあつては、此が最も主要な部分を占め、他の種々の方法は特殊の地形や事情に應じて行はるゝにすぎないのである。それ故此の方法の巧拙は山地スキーの能率に重大な關係を持つてゐるものである。

登行は一步步に滑降の享樂を築き行くのである。力の上に於て吾々は合理的方法によつて最小の努力で、最大の享樂を得る様工夫しなければならない。無駄な勞力を省い

て、一步をも空しくしない様に心掛けねばならない。次に此の方法に就て注意すべき點を記して見やう。

### 規則正しい登行角度

斜登行の際その登行角度 (スキーの長軸が水平面となす角) はスキーの滑度と積雪の状況とによつて定まる。スキーの滑度は、塗蠟によつて調節することが出来るものであるから、此を加減し、若し多數にて一隊となり行くときには、お互に大差のない様に、レギュレートして置かなければ、自分も困り、他の人にも迷惑を掛けることになる。雪質と、積雪量とは之に對して決定的素因をなすものであるから、塗蠟の加減は、雪を見てやらなければならない。「雪

を見る」と云ふことはスキー家の最も心掛くべきことであつて、此は主として經驗により體得し得るものである。同じ雪でもその積雪量によつて滑度が異なる。此は先頭をやる場合に特に痛感するものである。

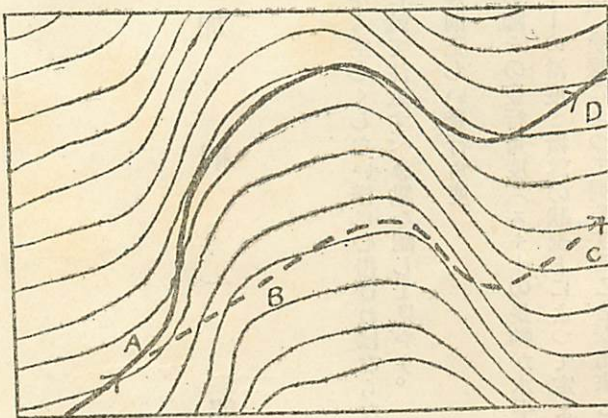
この登行角度は大抵八度乃至一二度の間にある。與へられたる地形と雪質とに於て此の角度をなるべく大きくするここが必要であるが、その限界はしばしば後滑りを引越さぬ程度でなければならぬ。一二度の角度で登り得る所を八度の角度で登つて行くとすれば、次の様な損失をすることになる。即ち一〇〇米の高さを登るに一二度の角度でもつてすれば、その長さ四八一米で足りるのに、八度では七一八米を要するのであるから、前者に比し約一・五倍となるのである。

又此の角度は各人に就て云へば、直滑降の時右山姿勢の人は左山の斜登行の際は、右山の場合よりもその登行角度が小さくなる傾向がある。此は電光形登行をなす場合に、殆んど常にあらはれる現象で、寫眞に見えてゐる二對のシユプールに就ても右山の場合よりも、角度が小さくなつてゐるのを窺ふことが出来る。

さて、此等の注意の後に考へらるべきことは、規則正しい登行角度と云ふことである。此は地形の凹凸に應じて、同じ角度を以て進むと云ふことであつて、従つて此の正確

に行ふべきには、行進線は必ずしも直線とはならない寫眞の様に斜面が平たく、傾斜が均一な場合は規則正しい登行は直線的なシユプールを残すけれども、第一圖の様な場合には等高線に従つて彎曲する。此の小さな傾斜度の變化をも無視せず、注意深く同じ角度を保つならば、一時の安易の

(圖 一 第)





電光形登行

爲に、又は不注意の爲に後に大いなる損失を來すことはいないのである。(A Bに於ける少しの怠慢は先に於てC Dの差となる。)

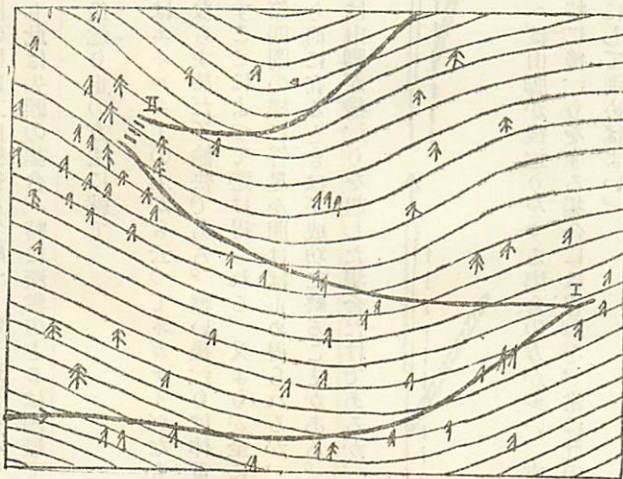
シユプールアンラーゲン

然しながら規則正しい登行角度は、しばしば斜面に存在する、樹木、岩石其他の障害物によつて、止むなく變化せられねばならない。此等障害物を適當に廻避して行くことも、大いに緊要な技術である。

それ故普通、此の電光形登行を行ふときには先づシユプールアンラーゲンを心の中に定めるのである。即ち少くとも前方に於て方向變換をなすべき地點を豫め定め、之を目標として進むのであつて、之を定める際に、障害物の最も少い、且つなるべく長く斜登行を続け得られる線を假定し、之に向つて努力するので、その際障害物に對しては、なるべくその上方を通過する様に心掛けるのである。第二圖は、針葉樹林中の電光形登路でその行進線が、常に限界角度内に於て、林木の上方を通過せる雛形である。尙此處に注意すべき事項は上方斜面の見通しのつく限り、方向變換地の豫定は、常に二つ先まで定めて置くことよいのである。即ちIの方向變換點(Spitzehe, Kick Turn)とIIは密接の關係があるから、Iを決定する前に、それより先のコース

をも考慮に入れなければならない。さうであるからI、IIの間を進行中にはIIは勿論の事、目標の中にあるのみなら

(圖 二 第)



すIIIの地點も定められてあらねばならぬ。方向變換の數はあまり多くあつては、いたすらに時間と

勞力を費すものである。然しながら、またあまりに長いことも次の様な點で好ましくない。

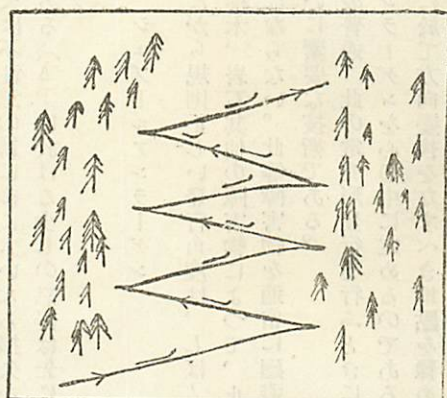
一、斜登行の際は山側の足の方が餘計に疲勞するから、一方のみを過勞させてはよくない。

二、誰でも左右の足の力は均一でない。それ故弱い方の足が山足となるときはより勞れ易い。先頭は後續者に對して、その不均衡を顯著にしない様に心掛けねばならない。

三、倦怠の感を起さしめる。

要は地形に應じて、なるべくは左山右山を均等に、且つ

(圖 三 第)

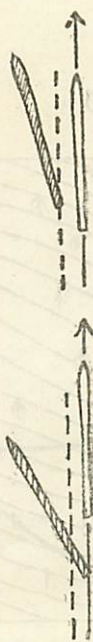


適度の長さに連續せしめるのである。

たゞ地形が、横登り開脚登り等を行ふには廣すぎる場合には第三圖の様に方向變換を省略する電光形登行をやればよい。然し此は先頭の場合、特に深雪のときは困難である

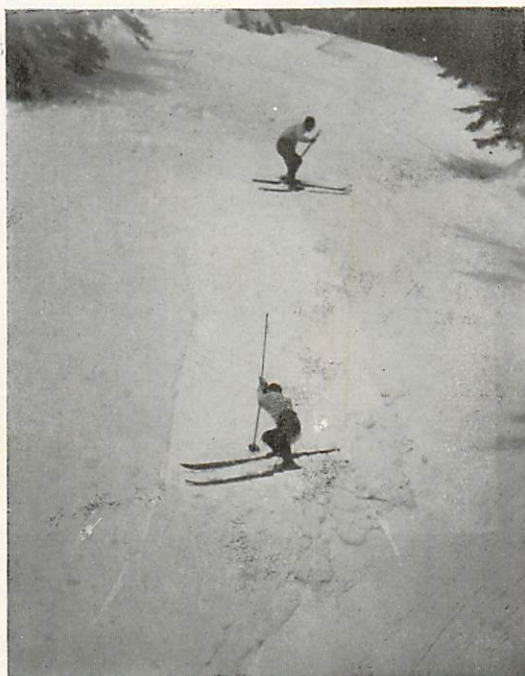
#### 後迂り止の方法に就て

後迂りはエネルギーの上から云つてネガティブなものであるのみならず甚だ不愉快である。軽い後迂りは体重を他の脚に移すことによつて避け得られる。又より安全に支へるには、第四圖の様に谷足を開けば止め得られるが、谷脚が山脚より前に在るときは不成功に終ることがある。また此の方法は山脚が後迂りを起した場合だけであるが、どち



らかと云へば山脚が後迂りをする場合の方が多し。或る區間だけが特に後迂りをする場合には谷脚を、常に此の法の様な位置にして進めばよい。

塗蠟の調節によつて後迂りを免れ得られない場合には豫備の縮革或は手拭其他のものでスキーを緊縛することである。また木片又は小技を縛りつけければ尙効果が大きい。此



滑 落 防 止

等はうまく工夫してスキーの先又は後からぬけてしまわぬ様にこりつけなければならぬ。若し此種の方法が出来なければ、スキー底面を濡らせば、そこに雪が凍りついて摩擦を減じてくれる。が滑降の際には之をナイフでけやり落すことを忘れてはならない。もつと完全な後滑りの装置として知られてゐるのはスキーの底面に、海豹皮 (Sealintelle, Seal skin) を(ける)ことである。此が取付の方法には種々あるが、先はスキーの先端に引掛け、他端はスキーの後端に留め、且つ横すべりをせぬ様脚部の前後でスキーに固定せしめる要がある。此と同様にして、細紐の綱を付着せしむるものもあるが、前者の方が進行の際には有利である。近來蠟によつて之をスキーの底面に附着せしめる様になつた。之は *Solms Steigwachs* と云ふ。戸外で用ひるには「メタ」其他の蠟を用ひなければならぬ。

海豹皮又は之に類する滑止装置を使用するの可否に就ては議論のあるところである。此が利點は(一)登行角度を大にして登行距離と時間を短縮し得(二)急斜面の直滑降の速力を減じて、安全ならしめ得(三)雪の附着を避け得る等であるが反對に(一)勢力を大ならしめ(二)前進を不快ならしめるのみならず(三)着脱に甚だ不便である等缺點尠くない。此方法より仕方のない場合、例へば長い細い谷で、横登行、開脚登行の用ひられない谷底を登らねばならない

場合に限つて有利である。殊に直滑降の速力を減ずる様なことは尠くともスキー滑走上避くべき事柄であつて、單に登山用具としてスキーを用ふる場合、滑降を急ぐときの方法である。此種装置は中山型山岳に於けるスキーイングには殆んど不用である云つてもよい。たゞ長途の高連山に於て、スキーを用ふる場合には必ず携行すべきものの一つであつて、之によつて二〇%以上の時間を利することが出来る。

尙此の他後より止として戦後にあらはれた方法としては蠟の利用である。従來は蠟は速力増大の目的にのみ使用せられたが、之を以て滑度を減ずるのであつて、確かに進歩した方法であるが、本邦ではまだ此種の蠟は製作せられてゐない。

#### 滑落の防上 に就て

雪面が硬化してスキーの稜付 (Kanten, edging) が困難なところでは横滑に注意しなければならない。クラストがスキーを力強く踏付けることによつて、破られ得る場合には之によつて安全を保ちつゝ進めばよい。また更に安全な方法として谷側の杖を谷脚スキーの縮具部附近でしつかりと雪面につき、山側の杖を横に(水平に)保ち先端を斜面につき、兩手にて之を持つ。即ち谷側の手は兩杖を持つこと

になる。かくして杖は同じ側のスキーと共に前出して行く様にする。か様にすればスキーの横滑りを防ぎ得るのみならず、萬一スキーが横滑りをしても直ちに山側の杖によつて寫眞の様な姿勢に移り得る。滑落の場合には先づ第一にスキーを緩付けすることにとめるが必要で、驚いて腰を落すのは結果が悪い。尻を中心にして體が回轉して頭が容易に下になることが多いスキーの緩付けで止まらず、横倒れになつたならば、頭が下にならない様に最善の努力をする。體をのばして山側の杖のリングの上方を兩手にて、強く握り、之を雪面に壓して滑落を防止するのである。スキー杖のリングから下が、完全に雪面に入つて、制動し得たならば充分に止め得るこゝが出来る。スキーはなるべくそるへる様にする。此の動作は反射的に行ひ得る様に練習をして置けばよい。杖の制動がとれると速力が大きくなつて、杖を雪面にしつかりこゝ、入れることが困難になつてくる。出来るならば横又は腹を斜面により多くつける様に工夫する。

樹木等に取付く様試みても多くは無駄である。却つて、頭を下にする様なこゝになる。落付いて渾身の力をこめて前記の方法を行ふのである。

硬化した雪面に乾いた新雪が積つてゐるまきには、油斷すると新雪が拂はれて此の滑落を引起すから、注意を要す

る。また斜面が急になると、山側に身を傾けるのが人情ではあるが、むしろ反對に谷側に重心を持つて行く方が安全であることは、力學的に明白である。即ちあまりに後付をしすぎることはよくない。



## スキ一の驚異第二編に就いて

岡村源太郎

昨秋來北海道及び關西地方に廣く公開せられた所の、獨逸ベルクシユボルト會社の製作にかゝるスキ一の驚異第一編「Das Wunder des Schneeschuhis, Teil I.」は、我國各地のスキー界に非常なる好影響を與へたものであるが、之は製作地の獨逸あたりでも最も價值あるシユボルトフィルムとして一般の大いなる賞讃を得たものである。作者アーノ

ールド・フランク氏は之が完成して後更に此の第二編の製作を試み非常な努力の結果遂に三ヶ年の後、より以上の好成績を以てスキ一の狐狩り「Eine Fuchsjagd auf Schneeschuhhen」と題するスキ一の驚異第二編を發表する事が出来た。第一部でさへも實にスキ一の驚異にふさはしい程の見事な映畫であつて、何人も手に汗を流す程の出来榮えであつたのであるが、第二部はフランク氏によつて拂はれた一層の苦心によつて、恐らくスキーフィルムとして技術の方面では以上の立派なものを得られまいと思はれる程の成功を収めて居る。殊に各國の一流のスキー選手を二〇名近くも

集めて、雪の最も好い時期を選び、場面を世界屈指のスキー地なるサンモリツツ附近エンガデーオンに取つてある之が氏の大きな苦心と相待つて、此の映畫を一層比類なきものとなす事が出来たのである。

一體スキー寫真程撮影の際に困難を感じしめらるゝものはあるまい。殊に豫め撮影を計畫してスキー旅行を爲す時に、猶一層此の事を痛切に感ずる。冬によく晴れた寫真向きの日はなかく、稀なものであるが、更に丁度その時雪質も數多のスキー家の充分なる活動に適するやうに良好である爲には、撮影日の選擇が一層困難となる。而も第二編に於ける如く技術に堪能なスキー家の多數を當日揃へた事は非常な努力に依るものと考へなければならぬ。

又第二編の如く全巻を狐狩りミ云ふ一つの筋で連絡するに就いては、第一編の如く單に技術や背景のみの指示を主としてあるものよりはより大きな注意が拂はれなければならぬ。そして第二編でのスキー家の動作は第一編に於けるよりも極めて速やかに撮られてある。スケート式滑走或

はスラローム等のスピードより推して、確かに第一部に於けるものゝ二倍位の速さになつて居る所もあつて、此の點からも第二編の全六巻はより以上の大作と認める事が出来る。出場したスキー家が果して幾日を此のフィルム撮影の爲に費して居るかは知らないが、以上の理由より推して、之が二ヶ年のウインターツアイトを経て漸く完成したものであると云ふ事は眞と認める事が出来るであらう。

脚色の巧妙に對しても、フランク氏に多大の敬意を表せずには居られない。純粹のシヨルボルトフィルムとしても極めて有益な場面が多い。殊に之は高速度撮影に依るものを挾めてある點が非常によい。ジャムピング、三段滑走、ジャムプターン等が高速度に依つて極めて懇切に示され、之が巧みに狐狩りの一つの筋の中に織り込まれてあるのである。之に依つて興味は極めて深く、技術の教示も比較的行届いて居る。

其他スキー術の實際と云ふ方面では、登山の場面が第一部より少かつたけれども、滑降は極めて多く撮られてあつてスキー家は其の滑降技術の殆ど全てを使用して活躍して居た。即ち平地の追跡には痛快な三段滑走を、緩斜面ではスケート式滑走を主に利用する。スラロームは大抵クリスチニアに依るものが行はれ、急坂ではステームクリスチニア、エルエステー等を有効に使用して居る。停止は殆ど全

てクリスチニアを用ひ、テレマークはそのシュヴングの性質上スラロームの或る一部に使用せられたのみである。

トレーケホップやジャムプターンは全く實用化して居るそして飛躍と云ふ事に對しては現在の我等には全然彼等には齒の立たない事を強く感ぜしめられた。スタイル等も實に見事なもので殊に本誌に載せられた事のあるカルセンのスタイルは、あのカルセンの云ふた言葉通りを精細に高速度で示して居た。其他狐狩りの主役を務めたシュナイダー（獨逸一九二二年選手權保持者）や、奥太利のシュネーベルゲル、又は他のヘルランド、バーダー等の選手の立派なスタイルを遺憾なく見る事が出来た。そしてジャムピングはカルセンの典型的ノールウエーススタイルと、バーダーやシュネーベルゲル等の純粹のスウイススタイルとの相違は、非常に目立つて居たのを見る事が出来た。

兎に角我等には得る所が非常に多かつた。ジャムパーに取つても、スキー登山家、クロツスカントリランナーに取つても、少しも眼を放す事を許さない場面の連續である。かゝるフィルムが我國に輸入せられたと云ふ事は、我々の非常に幸福とする所であつて、第一編、第二編は共に我國スキー界の進歩を速かならしむに充分力があつたと云ふ事が出来る。そしてこのフィルムを北海道に公開するに就いて、多大の好意を示された細川侯及び楨氏に對して、衷心

の感謝の意を表する次第である。

狐狩りの筋そのものは極めて簡單である。その説明に代へて、獨逸 Film-Kurier に載せられた此のフィルムに對する讚辭を次に紹介する事とする。

「エンガーディングに於けるスキ一の狐狩は一名スキ一の驚異第二部である。第一部をも凌駕した立派なもので、フィルムのモーターフである追跡を用ひつゝ、最後まで人を惹きつけて止まない。斯の如き美しい映畫が作られた云ふ事は實に驚異である。作者アノルド・ファンク氏は亦優れたる撮影者であるが、彼のエンガディング地方の白雪に蔽はれたアルベンに於ける世界的の妙技を、巧みに首尾一貫せる魅力ある筋を以て統一してある。又彼は處々に一寸としたユーモアを現はしたり、一抹のあまりやゝこしくない戀愛事件で色をつけたりして腕を振つて居る。この「狐狩り」の様に眞に賞讃に値するフィルムは稀であつた。又極めて文化的價値の大いなるものである。

筋は極めて簡單である。サンモリッツに於ける國際スキー競技會のあつた後「スキーペービー」と呼ばれて居る女スキー家が優勝者シユナイダーを狐にして「狐狩り」の遊戯をしやうと言ひ出す。此の彼女の計畫は出場選手一同の熱心な賛成によつて實行せられたのであるが、彼女は一つの奸計（彼女は狐の一方のスキーは米國ピンを打つてシ

ユプールが一目で見別けられるやうにして置く）に依つて遂に勝利を得る事になるのである。

さて此の遊戯の全部は獨逸、奧太利、瑞西、ノールウェー、フィンランド、匈牙利のスキー大家の妙技の連続である。そしてその間に時々愉快な事件が狹まれてある。即ち狐（シユナイダー）は時々奸策をめぐらして追跡者を迷路に導き、或は殆ど追跡者に捕へられさうになつた時その追跡者を轉倒させてそのスキーを脱させて惡戯を爲したりする。最後に全く逃路が無くなつてしまつた時偶然にもサンモリッツの治療客がスキーを馬に曳かされてせやつて來たのに遭ひ、之幸ひと馬上の婦人の氣付かぬうちに此の馬の綱を失敬して追跡者を煙にまいてしまふ。

特に注意すべきは第四卷の夢のシーンである。即ち狐が夢の中で身體が殆ど利かなくなつて、やつとのことで足を曳きずつて進む（高速度で寫す）と追跡者の群れがあちこち狐を搜したり、或は猛烈な勢で急坂を登つて追つて來るのに出遭ふ夢を見る。又彼のスキー友達であるカル、センがジャムプをしながらそのフライト中で狐の帽子を取らうとする夢等を見る。その内に夢から覺めると追跡者は直ぐ間近に來て居て、驚いて又逃走を始め此處に又猛烈な狐狩りが始まる。又雪庇や小川、家根、崖等をジャムプしてどん／＼谷間に逃けて行く。

遂に狐は全く追跡者達をまいてしまった。然しスキービーのリーゼルだけが彼のシユプールを辿つて、彼が夜小屋の中で眠つて居る所を發見し彼の帽子を奪つて勝利を得るのである。かくして驚嘆すべき巧妙さを以て撮影された美しい雪景、氷河、輝く雪煙等の幾多の畫面の後に此のフィルムは伊太利の花咲く春の陽景のうちにスクリーから消えて行くのである。

シユボートの上から見ても此の映畫は第一部よりも豊富である。然しそれも不思議はない。十數人の一流大家が出演して居るのであるから。狐の演技者であるシユナイダーの他に更に二人の共演者が觀衆の記憶に残つて居るであらう「雲蚤」と呼ばれる奥太利人シユネーベルゲルは、その嘘のやうな速力ミ片足で滑るここの巧妙なので知られ、ノールウエー人カールセンはそのジヤムプのスタイルの非常に美しいので有名である。此等の人々のジヤムプその他の技術の高速度寫眞は今日まで獨逸で撮られたフィルム中で最も價値あるものに屬する。

兎に角狐になつたシユナイダーが、三〇分前にベルクホテルを出發して、二〇〇米毎に紙を撒いて逃げて行くのを追跡者連が一定の時間内に狐を捕へなければならぬと云ふ筋になつて居て、結局シユナイダーの戀人に勝利が與へらるゝと云ふわけである。

## 彙報抄録

### ノイエ・ベルニナ・

### シャンツエ

瑞西エンガーデインのポントレヅナに新設されたノイエベルニナシャンツエは大體次の様な構造を有して居る。

アプローチ

長

一四五米

全

長

一一米

最大傾斜(スタートの近く)

三五度

中央部傾斜

二六度

シャンツエ

二度

ランディング・バーン

全

長

一〇〇米

最大傾斜(シャンツエより二五米―九米迄)

三八度

アウト・ラン

全

長

一二五米

最

大

幅

四五米

審判臺

シャンツエより一五米下部右側に一個

観客席 シャンツエより見て右側のアウトラン邊に二個ランディングバーンは一米八〇の高さで煉瓦工事をしてある結果、雪の状態に順應してバーンの修整が甚だ工合よくやれると云ふ。

アウトランは端が登り坂になつて居るのでフィニッシュのスイングが容易である。

又、多くのスキー家は、今シーズン中には必ず此のノイエベルニナシャンツエに於て今迄の世界記録が破られるだらうと云つて居る。

### 第三回全日本スキー

#### 撰手大會開催

右大會は来る二月十四日、十五日兩日、大日本體育協會主催にて青森縣大鰐スキー場に於て開催に決定せり。本年は關西、關東、東北、信越、北海道、樺太の六地方に於て豫選舉行の筈、地方代表者會議は一月三日、四日兩日開催地に於て開催せらるゝ由。

### 全國中等學校スキー

#### 撰手大會開催

其前身を札幌中等學校スキ驛傳競走に發して逐年隆盛に

向ひ而して其成果見るべきものありし札幌中等學校スキー競技會は、我が國スキースポーツ界の趨勢よりして此處に其内容の擴張と充實を必要とし、今回眞のスキースポーツの解釋より最も合理的な方法により斯界運動界の權威東京朝日新聞社の後援を得て此處に全國中等學校スキー選手權競技會を開催することとなりたり。而して開催地は本邦並びに世界スキー界より注目を受けつゝある札幌市外當部所屬スキー場を中心として舉行することに決定せり。

而して競技種目はジャムプ、十キロクロツスカントリースの二種目にして、ジャムプは當部所屬ジルバアシヤンツエに於て施行する筈で、これは本年アブロードに約廿米の槽を組み、ランディング斜面は扇形に籠の方を廣げて作つてある。そしてスタート地點は三ヶ所作つてある。クロツスカントリースは札幌郊外に適當なる地形選擇の上競技會三週間前には必ず決定發表の豫定なり。

大會期日は各地方の狀勢より考慮し特に一月卅一日(土)二月一日(日)の兩日間舉行の豫定、而して大會第一日目は午後一日よりクロツスカントリース開始、第二日目は午前九時よりジャンピング競技開始の豫定なり。

更に本大會に採用すべき競技規定は凡べて當部制定のものに決定せり。

吾等は日本スキー界の爲めに本大會が多少にても貢獻す

るところあらば満足に思ふ次第なり。而して吾等は本大會をして數多き本邦スキー大會中最も有意義なる大會の一たらしむべく努めんとするものなり。

尙次に本大會規定を附加するにつき、本規定参照の上參加希望校は主催側に一裁のことに關し御照會ありたし。

### 全國中等學校スキー競技大會規定

一、本大會ハ全國中等學校スキー大會ト稱ス

二、本大會ハ我國ニ於ケルスキー界ノ健全ナル發達ニ資スルコトヲ期シ兼テ學生相互ノ親睦ヲ計ルヲ以テ目的トス

右ノ目的ヲ遂行センガ爲當部ハ毎年全國中等學校スキー競技會ヲ主催ス

三、參加學校資格

所定ノ申込ヲ了シタル全國中等學校スキー團體タルヲ要ス

四、出場申込ヲナサントスルモノハ當部ヨリ申込書ノ交附

ヲ受ケコレニヨリテ記入該當事項記載ノ上是ヲ參加團體所屬ノ各監督者ノ手ヲ經テ所定ノ申込期日マデニ主催側ニ送付スベシ

五、競技種目ハ次ノ如ク定ム

クロツカントリレース(一〇軒)

スキージャンピング

六、本大會ハ毎年二月初旬開催ス

七、大會開催地ハ當部ヨリ毎年コレヲ指定ス

八、本大會ハ當部制定ノ競技規定ニヨリ行ハル、モノトス  
九、一校ヲ代表シテ各競技ニ參加セシムベキ人員ヲ次ノ如ク定ム

クロツカントリレース 三名以内

ジャムピング 三名以内

一〇、選手權及賞

イ兩競技ハ六等マデ入賞トシ一等十點、二等七點、三等五點、四等三點、五等二點、六等一點トス

ロ兩競技總得點ノ最高ナル學校ヲ以テ優勝校トナス

ハ優勝セル學校ハ全國中等學校スキー選手權把持者ト認メ當部ノ名ニ於テ之ヲ公表ス

ニクロツカントリレース、ジャンピングノ最高レコードメーカーニアニ對シ特別賞ヲ授與ス

一一、抽籤

參加者ノ順列(出發順序)ハキャブテン會議ノ際行フモノトス而シテ抽籤ノ場所及ビ時日ハ毎年主催側幹部ヨリ適當ノ時期ニ通告スルモノトス

### 北海道帝國大學文武會スキー部

北 大 第十二シーズン計畫  
スキー部

十二月廿三日より十日間青山温泉にて合宿。

一月一日より約十日間黒岳登山小屋にて合宿。

一月二日 吉例手稻山初登り。

一月六日 奥手稻山

一月十一日 手稻、奥手稻山。

一月十八日 當部大會開催、種目ジャブA、B、十五キロ、

五キロクロースカントリールレース

一月廿五日 手稻山(キヤムビイング)

一月卅一日、二月一日 全國中等學校スキー競技會開催種

目ジャムプ、十キロクロツスカントリールレース

二月六日 十勝岳方面、手稻山

二月八日 奥手稻山。

二月十四日、二月十五日 日本スキー選手權大會に選手派

遣の豫定。尙この前日に於て北海道スキー選手權

大會にも同様選手派遣の豫定。

二月十一日 奥手稻山、空沼岳。

二月十五日 三段山。

二月廿二日 手稻山(キヤムプ)

三月下旬 約一週間青山温泉にて合宿

四月中旬 スキー部納會

新刊書 二つ

スキーとスケート (鐵道省)  
定價一圓五十錢

鐵道省がその刊行の目的とするスキー地の紹介が、乃至スケート地の紹介が、本書の使命であらう。スケートの事は暫時おいてスキーにのみ就て見る時は先づ今迄のスキー書に比して優りはせずとも劣らないものと見る事が出来ると思ふ。

スキーとは何ぞや、何處へ行く可きか、スキー術と先づ大體此三者から成立して居り、スキー地圖すら加へてある編者自身は極めてスキー術そのものには日の浅い人であると聞いて居る。従つてスキー術は多くは單なる翻譯と見る事が出来、同時に幾分の誤謬の在するの否まれない。然し素人としてよく此だけ書けたと思ふ程である。特にその文の引用を見るに驚く程よく多くのリテラチュアールからとつてある。従つて譯に正直であるから素人の書いたものには思へない程である。

一言にすればまあ一冊は各自が持つて居ても價值があるとも言ふ可きであらう。

本書の編者たる鐵道省屬茂木鎮雄氏に充分の敬意を拂つ

てをく。

## スキーイング

(笹川速雄氏 定價貳圓 東京京橋  
區南傳馬町二丁目 目黒書店)

越後妙高山麓關温泉の笹川速雄氏が十年程の經驗を以つて書いたもの、此書の生命は貴重な同氏の經驗にある。従つて、氏自身の經驗で直ちに他を推斷しやうとすを點が感心出来ない。又、どこ迄も氏の經驗から割り出した此の貴重な書に徒に、ランやカウルフィールドの理屈をもち出した事は遺憾である。序にもあるが此事は中山氏自身が書かれてこそ價値ある事であつて、氏に於て此れを書く事は左程氏を價値づけるものではない。私の氏の著書に望む所は理屈抜きのをして經驗のみの書き振りを更に一層高めて欲しいと思ふ事である。

ジャムプに就ては可成りの誤謬がある。又他のテクニツクに就ては誤謬では無く私の考へと可成り異つた所がある様であるが、此れは私にとつて實に面白い又有益な比較であると思はせられる。同時にそれらの點が此事の一寸他に得られない眞價と見る事が出来る。

各論に就ては以上の様に感じたが、全体を通じて見ると先づ今迄のスキーの書物では白眉であらう。譯物でなければ杜選極りない某々の書なきとは比較にならない。譯本

は結局譯本の價値しかない。又要領のみを簡單に書き上げたものでは物足りなさが感じられる。それらの點を全く脱して居るのが此の書である。昨年あたり、高田某、東京某々、小樽某のもの等の出版をスキー界の爲めに呪つた私は心から笹川氏に感謝する。

特に本書で、著者の先輩小林氏を賛美した事は逝きしスキー界の一大立物の小林氏の遺業を思ひ起させて、此書の人間味を高めて居るところが嬉しい。(S・N)



# 會 告

本會では先に日本スキー団体總覽を輯集し、本誌上に登載致しまして多少便宜に資し得た事ではありますが、其後三シーズンを経過して、スキーの界の事情も著しく異つて参りましたので、今回更に此種の資料を輯めることに致しましたに就ては、主なる會團に對しては直接夫々御照會申し上げますが、尙遺漏あるををそれます故、万一讀者諸兄の所屬會團に對し本誌到着前、照會未着の場合がありましたら左記により一月二十日迄に御教示下さいませ様御願申し上げます。

- |   |             |    |                          |
|---|-------------|----|--------------------------|
| 1 | 名 稱         | 8  | 事務所(又は通信宛名)              |
| 2 | 設 立 年 月     | 9  | 代 表 者                    |
| 3 | 目 的         | 10 | 常 務 者                    |
| 4 | 會 員 數       | 11 | 講習會、競技會の主催、スキー場の設備、其他の事業 |
| 5 | 會員の種別及び會費   | 12 | 主なる研究事項、技術上の傾向           |
| 6 | 會員の資格       | 13 | 備 考                      |
| 7 | 役員選任の方法及び任期 |    |                          |
- 尙會則、競技規定等の印刷物がありませんたら、添付御寄贈に預り度う存じます。

鹿田ヨシ浪著

スキー雑誌

第六期 一十五頁

山 野 ス キー の 會

廣田戸七郎著

# スキージヤムピング

四六判 一七五頁  
定價 金 壹圓

スキー競技に於て最も重要なジャムプの一切を解説せるものである。

北海道帝國大學スキー部編纂

# スキー術階梯

四六判 一二〇頁  
定價 金 六拾錢

本年度増補改訂再刊。直接本會より御求めの方は特價金五拾錢

札幌山とスキーの會發行

優良なるスキー地を以て知られたる  
設備の完全を以て知られたる

# 五色温泉

奥羽本線板谷驛より近し。  
東京より九時間にて達す。

山形縣南置賜郡山上村板谷

具田其十一字スススス

小 井

井 野 野 野 野

GET SUPERFINE SKEES.  
AND MAKE AN  
EXCELLENT  
RECORD!



優秀ナルスキート其用具

小 樽

梅屋運動具店



# 靴一キスと靴山登

角目丁四區郷本市京東

## 店靴屋田太

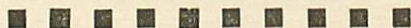
番二一七四小話電

番七二一六京東替振

# 青山温泉

スキー地として重要な条件で  
ある所の雪質、雪量、地形等  
皆充分に恵まれてゐる当温泉  
は、年來の経験によつてスキ  
ー家の爲に出来るだけの御便  
宜を計ります。

登山滑雪スキー滑



東京市本郷區四丁目

半里一りよ驛布昆線本館函

間時五りよ幌札

間時七りよ館函

東京市本郷區四丁目  
電話東京六一二〇番

◆山とスキーの會は北海道帝國大學スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たるる方が一人でも多くお読み下さることをお願いいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願いします。又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、**、**を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C.G.S.係によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

定 價 金參拾錢

\*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

\*御送金はなるべく振替にてお願い致します。

\*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

\*前金の切れた時には最後の分の包装にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

\*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雑誌の代價は頂きます。

大正十三年十二月三十日印刷

大正十四年一月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯兼 佐々木 政 吉  
印刷兼 佐々木 政 吉  
發行者

札幌市北二條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

札幌市北六條西六丁目

發行所 山とスキーの會

振替口座水樽八四九五番

La Gazeto  
 de la  
 Monta kaj Skia Klubo  
 No 45. Tan. 1925. Sapporo. Japanujo.

美滿津ノ  
 ウィンター・スポーツ  
 各種用具



合 名 會 社

美滿津商店

東京・本郷・赤門前

大正十四年十一月一日發行  
 大正十三年十二月三十日印刷  
 大正十三年七月二十七日第三種郵便物認可

山ノスキー！ 第四十五號

定價金參拾錢